



＊第21回＊

劉 江

早大

故郷から3,600km離れた日本にて研究者になるまで

中国の片田舎に生まれて

私の故郷は中国四川省の南西に位置する西昌という小さな町です。四川省の省都である成都から列車で12時間も離れたこの町は、周りを山に囲まれた非常に静かな平原であり、イ族と呼ばれる少数民族の自治州として発展した町でした。とても気候よく資源も豊富な町ですが、少数民族のいくらかは現代とは思えないような、人里離れた自給自足生活を送っており、時折彼らの生活を目にしては文化の違いに驚いたものでした。

そんなこの町の唯一誇れることは、中国政府の衛星ロケット発射センターです。中国に3カ所ある人工衛星の発射場のうちの一つで、私の自宅からも何度かロケットが飛んで行くのを眺めたことがあります。これは日本でも稀な経験かもしれません。それほど近くはないので月ほどの大きさに見えますが、それで大きな音とともにロケットが炎を吹き上げながらゆっくりと重力に逆らって上昇する風景はなんとも感動的です。そしてロケットの発射は、間違いなく中国の最先端の技術の集約であり、少数民族の自給自足生活とは対極的でした。これらの違いはどこから生まれるのだろうか、その疑問から私の好奇心が育まれたのかもしれない



イ族の伝統衣装を着た私

ん。たくさん勉強して最先端の技術を身につけたいと幼心に感じたのを覚えています。

理系に進むまで

今になって振り返ると、理系を選んだ理由は私の家庭にもありました。私の両親は共に電力会社で働いており、電気関係の専門用語は聞き慣れていました。また父はよく家でハンダを手にして回路を作ったり、家の配線や電気製品の修理も行っていました。当時の中国は日本ほどに産業が整っていませんから、こういった実用的な技術は生活する上で非常に重宝しました。例えば、冷蔵庫が普及したのは私が小学生の頃でしたが、当時の冷蔵庫は雷による電圧の変化で故障してしまうほどでした。雷の多い時期に学校の同級生の家の冷蔵庫が壊れても、我が家の冷蔵庫は大丈夫、父のお手製の保護回路が搭載されていたから。このように、技術というのは生活を安心させてくれる、頼もしいものでした。だから私もとても理系科目に興味を持ちました

し、故に沢山勉強もして得意な分野でもありました。

正直なところ、今となって日本で理系がネガティブなイメージを持つと聞いた時には驚きでした。中国では、単に私が得意なだけでなく、理系は人気科目です。中国の有名な言葉に、「数学、物理、化学をよく学ぶと、世界中のどこに行っても怖くない」という言葉があります。理系科目は、文化や地域、政治、流行に影響されない独立な学問であり、万国共通なのです。だから、特に国土の広い中国では、確実なスキルを身につけられる理系の方が就職でも有利です。成績が良い学生はほとんど理系を選びます。だから私にとって理系の選択は当たり前のごとでした。

大学卒業から日本への留学

大学での専門は電子工学でした。機械や電気(強電)の分野と比べ、女性でも簡単に勉強できる分野をと思って選びました。特に回路設計が一番好きな科目で、教科書で学んだだけでは物足りなく、電子回路のサークルにも入りました。このサークルでは、ボランティアでキャンパス内や、近くの農村に行つて電気製品の修理等をしていました。正直なところ最初は全然うまくいなくて、先輩方がいろいろな製品を修理しては感謝されているのを羨ましく見ていただけでした。だんだん腕が上がった頃には、今度は簡単な電子機器の開発にチャレンジしました。当時は自前のスピーカを作るのが流行し

†早稲田大学 理工学術院 国際教育センター
"A Fellowship Experience in Japan: An island nation 3600km away from home" by Jiang Liu (Faculty of Science and Engineering, Waseda University, Tokyo)

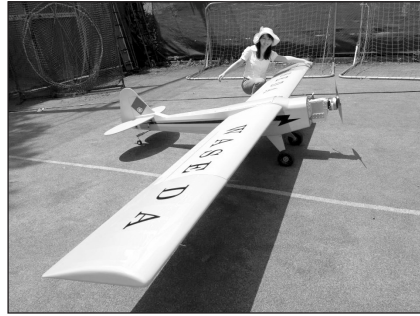


ており、私もやってみたのですが、音声のクオリティは悲惨なもので、製品と呼ぶのにはほど遠かったです。一方、友人の持つ日本製のスピーカは完璧でした。もちろん当時の中国ではとても高級品でしたが、それだけの技術の差を生じる技術大国に憧れて日本に行かなければと思い、留学を決意しました。

日本に留学することにあまり不安はありませんでした。日本は先進国ですから、中国よりも治安が良いですし、先進技術を学べば良いキャリアになるはずですが、当時日本語はほとんどわかりませんでした。それも心配では有りませんでした。中国はもともと多くの方言があり、日本語の方言と違ってまったく互換性がないため、ほとんど外国語のようなもの。だから言葉が通じ合えない状況に慣れているのでしょうか。日本も漢字文化なので大丈夫だと思っていましたし、実際に問題ありませんでした。私にとってはそのことよりも、片田舎を脱出して「井の中の蛙」とならないよう、最先端の学術を身につけたかったのです。何せ、ここは中国の内陸の山奥、日本に来るまでは言葉通り大海も見たこともなかったのですから。

博士取得そして教育者に

日本では修士課程として早稲田大学国際情報通信研究科に入学しました。そして無線分野の嶋本薫先生の研究室に所属し、研究の基礎から指導を受けました。研究室は多くの実験装置を備えており、これらを使って実験を行っている時は最先端の技術に触れている気がしてとても楽しかったです。博士課程に進学した理由は、もちろん研究が面白かったというのがありますが、将来のキャリアを考えてのものでした。人生は長いので、たいいてい人は就職してから30年以上働くでしょう。それと比べると博士課程は長くありま



無人飛行機の実験風景

せん。そして博士号は最高の学位ですから、とても魅力的に感じました。就職はしっかりと勉強し続けていればいつでもできるはずですが、そんな理由から博士に進学することを決めました。

今でも、中国の友達から博士に進学した理由をよく聞かれます。さすがの中国も日本と同様に女性の博士は多くありません。「中国人は三種の人間がいる：女、男、女博士」などとからかわれることもあります。また女性は若いうちに就職して結婚したほうが良いと思う人もいられるでしょう。実は、私はこういった偏見を知りもしませんでした。ですが、今でもまったく信じていません。私の周りの博士の女性は本当に個性が豊かな元気な人ばかりで、エネルギーにあふれていて、多くの方は結婚もして私生活も充実しています。そして独立した女性として社会でも活躍しています。女性らしい、明るい、優しい、そんな女性としてのキャラクターと、女性のキャリアというのは両立できるものだと思います。男性でもなかなか博士に進学する人は少ないと思いますが、もし博士進学を悩んでいるのなら、私はぜひお勧めします。もちろん、博士はとても大変でしたが、チャレンジすることに慣れれば、それを乗り越えられた時はとても喜びを感じられます。特に国際会議に論文が採用された時には、結果が残りますし、また一緒に学会に参加する世界中のトップ大学の研究者と肩を並べ、また



いつも仲良しな理系女博士

友達になれたり、その経験は計り知れません。一方で、私は世事に疎い研究者に成りたくないで、積極的に対外活動にも参加しました。IEEEの学生団体を創立し、日本の他の大学と一緒に、勉強会や企業見学会などのイベントを企画したりしました。

現在は早稲田大学理工学術院の国際コースの講師として働いています。国際コースなので海外からの学生がメインですが、クラスの女性学生の比率は低くはありません。科学技術、特に情報技術が大きく世界を変えて来た昨今、そして男女平等社会への女性進出からも、理系の知識を学びにくる女性が国際的に高まっているのだと思います。そして教育者としては、彼らの学問に対する好奇心を挫折させないように、学ぶことの楽しさを提供することに努めています。同時に、自分の研究に手を抜くこともできません。「学ばざるもの、教えるべからず」という教えにあるように、私も常にチャレンジし続けようと思っています。

(2015年2月8日受付)